

平家物語考證

4

一六〇六七	和書門
二〇二	函
九	架
一	冊
類	號

一六〇六七	和書
二〇二	函
九	架
一	冊
類	號

內閣文庫	
番號	和 16067
冊數	12 (10)
函號	203 163



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

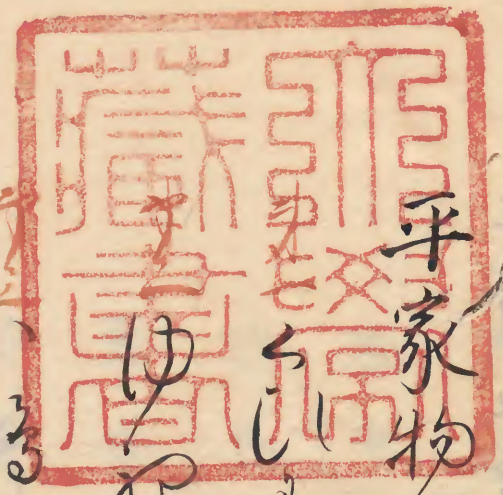
Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007. TM: Kodak



平家物語考証目録巻下



しきりの

ゆりめんじき

いんかんじき

いんかんじき

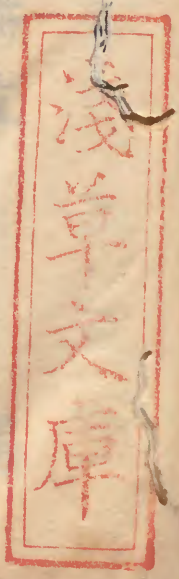
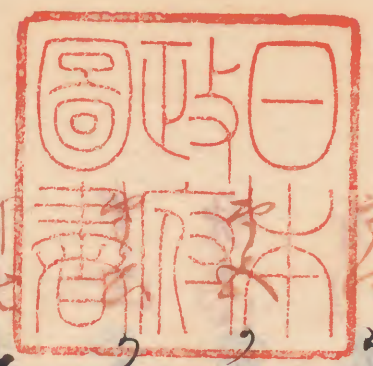
いんかんじき

いんかんじき

いんかんじき

いんかんじき

いんかんじき



中
 平家物語考證卷之十
 松堂閑人四醉生
 洛陽後學源
 道格
 集
 編
 羽林中郎將藤原定俊
 補
 壽永三年二月十日或秘記云入夜
 藏人右衛門權佐定長來仰院宣云
 平氏首亦不可被渡旨思食而九郎
 義短加羽範頼亦申云被渡義仲首
 不被渡平氏之条太以無其誤何故
 被惜平氏哉之由殊鬱申云此条如

平家物語考證卷之十

松堂閑人四醉生

洛陽後學源

羽林中郎將藤原定俊

平家物語考證卷之十

壽永三年二月十日或秘記云入夜

藏人右衛門權佐定長來仰院宣云

平氏首亦不可被渡旨思食而九郎

義短加羽範頼亦申云被渡義仲首

不被渡平氏之条太以無其誤何故

被惜平氏哉之由殊鬱申云此条如

何可計申者申云論其罪科与義仲不
吳又為帝外戚亦其身或昇口相或
近臣雖遂誅伐被渡首之条可謂不
義近則信賴口頭取不被渡也加之
神聖寶劍猶在殘之賊手無為歸來
之条第一之大事也若被渡此首者
彼賊亦弥令勵悉心欵仍旁不可被
渡其首將軍亦只一旦申取存欵被
仰子細之上何強執申哉賴朝定不
承申此旨欵此上左右可在勅定者
定長云被向九大内大臣忠親口

亦各申不可被渡之由一同二以下
錄下段○十一日記云及晚頭泰院
平氏誅罰之間人々多參入三余依
取勞于今取遲也八條院御同宿也
以定長入見泰仰云彼岸之間依念誦
無暇仍不謁取勞之由間食不泰同
事也世上事迷成敗一雖自今以後
被癸仰事無纖芥不可申也抑平氏
首事申間可然又人々同申不可被
渡之由而將帥亦殊鬱申其上強又
不可及護惜仍仰可渡之由一云申

畏承了之由又例平氏之許遣書札
通音信之人不可勝計王候口相以
下貴賤上下大都洛人無殘輩就中
院近其甚多云余雖例此事敢不相
驚一切無此恐故也以之思之負直
之道廢而猶可廢者歟○十三日記
云此日被渡平氏首其教公口預不
可被渡之雖有其儀武士猶鬱申
云如何通盛口首同被渡了可彈指
之世也○十九日記云傳例平氏歸
住讚岐八嶋其勢三千騎計云被渡

之首中於教經者一定現存云又例
資盛負能亦為豐後住人亦允生被
取云此說日來雖風聞人不信受
之處事已實說云

平氏の云々云々

補軍將凱旋ノ日檢非違使二首
級ヲ授ルコト土記中右記等二
出夕リ東洞院ハ西洞院十ルベ
キ力尤獄ハ近衛西洞院ニ了リ

たより女ほり

同二月九日記云今日三位中將重

衡入京着褐直垂小袴之即禁固土
肥二郎实平頼朝即後○十日記云
定長又詔云重衡申云書札副使者
重衡良遣前内府之許乞取劔塞可
從云進上云此事不可叶誠任申談可御
覽上餘者錄○廿九日記云九郎為
追討平氏來月一日可向西國之由
有議而忽延引云或人云重衡取遣
前内大臣許之使者此兩三日取參
大内申云畏承了於三个宝物并主
上女院八条殿之如仰可令入洛於

宗盛者不能參入賜讚岐國可安堵
御供二八清宗了可令上洛之此事
實君因茲追討有猶豫歎
三月一日記云定長詔云重衡取遣
之使者左衛門取參入有消息之返
事申狀大畧廢和親之趣也取詮源
平相并可被召仕之由次此条頼朝
不可承諾然者難治事也但此上於
別御使來之時奉子細一可申取存云

こ八よりの車の

補裝束抄云淺官外記史等ノ輩

モ小八葉ヲ用ルナリ但シ下輩
ハ物見切ナル事也

木蘭地のむぎ

木蘭地見第二卷直垂見第一卷

赤衣

朱袷赤衣事也
紅ニ葵字あり後
ちり文不同裏平角色延尉彈正ハ
黄裏五位外記史ハ蕪芳裏也夏ハ
唐物色文ホ冬ハ同
官外記ハ入ら
じとて袍の左右のらん
のあごと中ハ
かゝりて角織の程ハ
志あり他官

おぼりののりつき

補院宮ニ召次所アリ召次ハ内登ニ同

シ花形凡ハ小舎人童ニテ御壺ニ伺候

スルモノカ今犬凡カ類ナルヘシ

こぼ中おの使ハ平ニ尾門ノ主

見或秘記三月一日記 註上

末のむぎののりつき

補末のむぎののりつき
その中おの使ハ平ニ尾門ノ主

見于詠歌大概

民入らるるのりつき

補親範ハ從三位平範家ノ子ナリ

系圖ヲ考ルニ親範ニ女子見ヘズ

月々入登しゆらん正んの中

ろくろのまるとうろく

補未考得

うけ文の中

それ日月ハ

補按ニ平氏谷報ノ書物語東鑑谷

別ナリ玉葉ノ記スル趣キ又殊

ナリ事實ヲ論スルトキハ東鑑

ヲ正トスヘシ物語ノ所記モ文

詞甚夕正シク健カク作者ノ

偽造トハ見ヘス玉葉ノ記スル

所ハ只傳聞ノミ然トモ是時ハ

嶋へ院宣ヲ下スト云ニハアラ

ズメ重衡ヲシテ朝儀ヲ達セシ

ムルモノカ何レカ是ナルコト

ヲ知ラス

ういらんの中

白く谷れかうゆんちう

補元亨釋書云秋源空姓漆氏作

州人源空ハ名ニメ法然房ハ

所居ノ名ナリ

ころしれりしなり

補佛書二次第乞食等ノ法アリ

頭陀ハ抖擻ト翻ス萬事ヲウキ

ハラヒテ執着セサルノ義ナリ

まゆこ

補須彌名義集唐言妙高

ころん

補少數微塵等名義華名嚴經等

ニ詳ナリ

うけし人牙

補四教儀等ニ云ク修中品善者

こ

耳うまうとりて

補阿彌陀經云執持名号

見耳うまう

補專称名号至西方ノ文禮讚日

中偈

祇んくまう

補念々補名常懺悔ノ文般舟讚

まんくせ

補利劔即是弥陀号ノ文同上

まんくせ

補身口意ノ三業行住坐卧ノ四
威儀ヲ云佛書ニ詳ナリ
件乃祝ハ云

補今ニ知恩寺ノ秘藏トス
ス

十日後梶原平之宗時ノ
弟志ヲヨリ九節ノ
弟平ノヨリ九節ノ
十日梶原平之宗時ノ

元曆元年三月十日或秘記云今日

重衡下向東國頼朝取申請云

同三月二日東鑑云三位中将重衡

卿自土肥次郎實平之許渡源九郎

亭實平依可赴海西也○十日記云三

位中将重衡今日出京赴関東梶原平

三景時相具之是武衛依令申請給也

多んさ才にのりまよ

補按ニ仁明天皇第四皇子入康

親王出家ニテ山科ニ退隱ス故

二四宮河原ノ名アリ蟬九十八

此ヲアハルカ又博雅ノ三位

ノ音人ニ琵琶ヲ習シハ不幡山
ノ故事ナリ相坂ニハ非ス
りやのこのい

補新古今雜部をの中ハこゝかてとに
あつてとるをとりてとるは

補按ニ和歌ニ詠スルハ多ク勢多ノ長橋
トアリ唐橋ト稱スル例イニ夕考ス欄干

擬寶珠備ハレルヲ唐橋ト稱スルトキハ
其ノ結構ニ就テ云ナルヘシ兼盛家集

其ノ結構ニ就テ云ナルヘシ兼盛家集
此調を多しゆるを治れ其調の長くしるをとりよ

い

補野路ニ雲雀ノ讀合セイニ夕

考ヘズ勢多ニハ雲雀ノ讀合ア

リ所ツ、キナレハ野路ニ用中

ルモノカレハ野路ニ用中

履よりのりかゝる

補拾玉集其しるる履あり多し讀合ア

波よりたつたれぬ反慈徳

い

補膽吹山近江和歌ノ名所ナリ

ゆきれりや

補入を海女婦の正に全れ扱ひてしあてし
のちとてそと枯の風此和歌新古今雜部ニ出たり
いふるをよむといふ

補不破ノ関ハ今ノ関ガ原ヨリ
ハ北東ニアリ関ノ藤川今ニ名
ヲ残セリ其ヨリ株瀬川ヲ渡リ
尾張ノヲリ津ニ到リ熱田ヲ過
テ鳴海ニ行ク古ノ驛程ナリ常
盤井入道歌ニ折後を今つていふ
浮ト云コレナリ

補濱名以橋ニ松入江右歌ノ讀
合セナリ堀川百首永縁ノ歌ニ

今ハこれ橋名と云ふ名ハいと云ふ
トアレハ是時濱名ノ橋ハ絶

比田の宿

補池田ノ里遠江ノ名所ナリ公
卿補任宗盛平治元年遠江守
按ルニ平治元年十二月廿七日
勲功ノ賞ナシテ遠江守ニ任ス
時二十三歳ナリ遥授ナルコト

シカリ又翌年正月淡路守ニ任

ス當國ノ守タルコト僅ニ二十

餘日ナリ物語ノ説信ナシカク

シ蘇我宗廟平赤平並其子

さよの中山よりのきふ小と又なるへり

おほい杯ハ

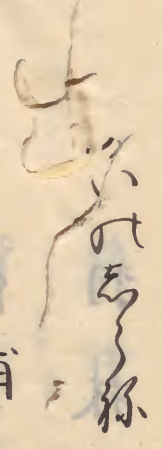
西行法師之歌ニニ列リ

としと経く入る可しなほいさよの

あうらう依夜の中山

あうらう

補手越崎駿河少名所ナリ



補名寄ニ大そのこその浦のうら

補相模國小余綾磯名所ナリ

こその大

補名寄ニ大そのこその浦のうら

こその大

補名寄ニ大そのこその浦のうら

こその大

補八松ナリ

こその大

こその大

こころ

補名寄相模ノ名所ナリ

んこう

補同上

んし

壽永三年三月廿七日東鑑云三

品羽林著伊豆國府境節武衛令

坐北条給之間景時以專使伺子

細早相具可參當所之由被仰仍

伴參但明且可逐面謁之由被仰

羽林 ○廿八日記云被請本三

位中將

藍摺直垂引
立鳥帽子

於廊令謁給

仰云且為奉慰君御憤且為雪父

尸骸之耻企石橋合戰以降令對

治平氏之逆乱如指掌仍及面拜

不屑眉目也此上者謁槐門之事

亦無疑次者羽林答申曰曰源平

為天下警衛之處頃年之間當家

獨為朝廷之計昇進者八十許輩

思其繁榮者二十餘年也而今運

命之依縮因人參入上者不能厄

石携弓馬之者為敵被虜強非耻

辱早可被處斬罪無纖介之憚
奉向各聞者莫不感其後被召預
狩野介○同四月八日記又云
本三位中将自伊豆國來著錄倉
仍武衛點郭内屋一字被招入之
狩野介一平族即從等每夜十人令
結番守護之○廿日記雨降終日
不休止本三位中将依武衛御免
有沐浴之儀其後及秉燭之期祇
為慰徒然被遣藤判官代邦通工
藤一膳祐經再官女一人手号千等

於羽林之方剝被副送竹葉上林已
下羽林殊喜悅遊真移魁祐經打鼓
歌今様女房彈琵琶羽林和橫笛先
吹五常樂為下官以可為後生樂由
稱之次吹皇輦急謂徃生急凡於事
莫不催興及夜半女房欲歸羽林暫
抑留之而盃及朗詠燭暗數行虞氏
淚夜深四面楚歌声云其後各歸參
御前武衛令問酒宴次第給邦通申
云羽林云言語云藝能尤以幽養也
以五常樂謂後生樂以皇輦急號徃

生急是皆有由欤樂名之中廻忽者
元廻骨大國葬礼之時調此樂云吾
為囚人被誅條存在且暮由之故欤
又女房欲歸之程猶詠四面楚歌句
彼項羽過異之事折節思出欤之由
申之武衛殊令感事之體給依憚世
上之聞吾不臨其座為恨之由被仰
武衛又令持宿衣一領於千手前
更被送遣其上以祐經邊鄙士女還
可有其興欤御在國之程可被召置
之由被仰云祐經頻憐羽林是往年

侯小松内府之時常見此羽林之間
于今不忘舊好欤

みんたうハ

補成湯夏臺ノ囚文王姜里ノ故
事史記及帝王世記等ニ見夕リ

ちていめい

補十王經ニ見夕リ

めゆいの

補カ夕ビラハ一重ノ下着ナリ

布絹ヲ用フ袋束雜事抄ニ白キ

カ夕ビラ老少トモニ用フト云

コレナリ
補女童ナレハ
髪ノ長カラヌヲ
云ナリ
袖ハ裳ヨリカミ着ルモ
ノナレバ腰ヨリ上ニ髪ノ末ノ
アルヲ云フ
ソんさうたし
補髪ヲ洗フガ夕ノナリ櫛ハ手
あれはこうし

補盛衰記白川宿ノ長者ノ娘トス

羅綺のそなふる情ありて機婦は神し

菅家題春娃無気力詩之序羅綺

之為重衣妬無情於機婦管絃之

在長曲怒不関於伶人朗詠集註

云言羅綺者薄織之綾也美人力

微猶為重衣是機女無情而可謂

洗ニ入ルベキニハアラ子トモ

沫スルカタ夕ノニ具ノ來ルナリ

盥等ノ具類聚雜要抄ニ見タリ

あれはこうし

補盛衰記白川宿ノ長者ノ娘トス

羅綺のそなふる情ありて機婦は神し

菅家題春娃無気力詩之序羅綺

之為重衣妬無情於機婦管絃之

在長曲怒不関於伶人朗詠集註

云言羅綺者薄織之綾也美人力

微猶為重衣是機女無情而可謂

厚織也又日伶人主絃長久舞女
弥可瘦

十惡（一）不（二）行（三）わん（四）せ（五）と

後中書王讚極樂寺文雖十惡兮猶

引拱甚於疾風披雲霧雖一念兮必

滅應喻之巨海納涓露

み（一）ま（二）ら（三）く

補五常樂平調

り（一）ま（二）ら（三）く

補皇慶平調按二天寶ノ樂曲十

リ黄慶ニ作ルベシ

てん（一）ま（二）ら（三）く

補轉手ハ軫ヲ云千手箏ヲ彈ス

重衡琵琶ヲ取テ律ヲ和スル也

こ（一）り（二）い（三）ま（四）ら（五）く

橘相公賦項羽燈暗數行虞氏淚夜

深四面楚歌聲○項羽本紀曰漢王

与楚王爭天下八年項羽勢盡隱垓

下漢王軍四圍項羽々々夜深起飲

帳中有后名曰虞項羽歌曰我力拔

山氣蓋世於時不利威勢廢虞姬兮

其奈何汝歌數回駕騅逃去漢騎追

之項羽切漢二將逐到江東自刎而
死

補重衡曾テ藏人頭夕リ依テ中
人ト称スル力是時ハ三品羽林

補平家花揃ト云古キ草紙アリ
據口アツテ撰スルモノ力猶考

フベシ

予も此の中人の...
...
...

文治四年四月廿五日東鑑云千壽
前卒去年二其性大穩便人々所惜
也前左三位中将重衡参向之時不
慮相馴彼上洛之後戀慕之朝夕不
休憶念之所積若為発病之因歎之
由人疑之

補又云御臺所御方女房號千手前

日本書紀...
...
...

ワウツケ衣通娘の神とあり...
...
...

有秘說

日亦必致社

古語拾遺曰素盞鳴神奉鳥日神行
甚元狀于時天照大神赫怒入于天
石窟而盤戶而出居乃云令常闇於
是從思兼神儀令石疑罔神鏡曰像
之鏡初度所鑄少不合意是紀伊國
次度所鑄其狀美麗是伊勢也乃太
玉以廣原稱詞啓曰吾之所捧寶鏡
明麗恰如汝命乞開戶而御覽焉仍
太玉命天兒屋命共致其祈禱焉干

時天照太神中心獨謂比吾幽居天

何由如此之歌樂聊天手力雄神引

啓其扉遷在新殿天照太神高皇產

靈尊乃相詔曰天葦原瑞穗國者吾

子孫可王之皇孫就而治焉寶祚

之隆當与天攘无窮矣即以八咫鏡

及草薙劍二種神寶授賜皇孫永為

天璽所謂神璽也即勅曰吾兒視此室

鏡當猶視吾可笑同床共殿以為祚

鏡

補延喜神名帳云紀伊國名草郡

日前神社國懸神社
高野の山

補拾芥抄云金剛峯寺紀伊國弘
法大師入唐之時遙擲置三鈷之
地也大師此處入定期慈尊出世
秘笈たうらり時より

補魚名ノ流尤衛門尉以頼力子

補諸記ヲ按ニ雜仕樋洗ハ女中

賤隸ナリ

ていりり

補集仙録曰王母者龜山金母也

東方朔云高祖名同幸下り三才

補前漢書上傳ヲ載夕リ

見らしき

補三種ノ善知識アリ法數等ニ

詳ナリ

さめりり

補往生院念佛房ハ源空ノ門人

二ノ念佛宗ノ一派ナリ黒谷上

本邦人傳ニ見夕リ三宝寺ト云小房

今ニ残レリ時頼法師ガ畫像了

布衣

リ所隠ノ房ナリト云

補布衣ハ狩衣ナリ六位ハ布ヲ

用フ五位ハ絹ヲ用フ時頼ハ瀧

口ノ侍ナリ布狩衣ヲ着セルナリ

ハ

立忍ほう

補三光院記云立烏帽子ハ堂上

一同着候地下不着用候ハ風折

立烏帽子同事ナリ三光院ノ記

スル所ハ後世ノ儀ナリ物語ニ

於テ見ルベシ

らんどう

補鬢ブクヲ出スナリ鬢ブクヲ

出サズルハ輕服ノ儀ト云

クヤのすれの事

昔んきこれ門

補元亨釋書觀賢傳ニ延喜二十

一年ノ事トス

をり色のほ衣

補釋書ニ紫衣トス共ニ非ナリ

香染ノ衣ナルベシ

中納言すけのみこと

補公卿補任ヲ考ルニ延喜中中

納言資澄ト云人ナレ橘澄清ト

云人アリ是ヲ云カサレトモ奉

使ノ事秋書等ニ見ベス

けいそく

補鷄足山大明一統志雲南ノ條

下ニ出夕リ

入定ハ

補空海卒去ノ事續日本後紀ニ

詳ナリ

いんげん

ひんげん

補繩麻ニ踞スルハ觀念靜坐ナ

リ又遺教經云初夜後夜亦勿有

廢中夜誦經以自消息

あけ

補景康打死ノ事平治物語ニ詳

ナリ

いんげん

補四句ノ文清信士度人經ニ出

タリ得度ノ時必ズ戒師ノ授ク

ル文ナリ、
補唐皮小鳥ノ名義盛衰記ニ出
夕リ怪異ノ説信シ難シ猶考へ
了ルへシ
千里のまの

補千里岩代十モ二紀伊國ノ名
所ナリ末を以ちさとの後日ノ常々
とらる岩代の松藻垣草
多のんげいの事
いさ川

補岩田川紀伊國ノ名所ナリ

おしり川

補音魚川并瀧同上

六えんげ

補法華懺法二六根懺悔身段有

神のろ

補神藏山紀伊國ノ名所ナリ

さのね系

補依野岡紀伊國ノ名所ナリ

花山の法

補采花物語 永延元年ノ下ニ花
山院ハ其ノ冬山ノて以て戒世ノ御所
今ノよめつて居てまことくらせをぬかさんま
わの後のいしに位の少ぬき

補玉葉云安元二年三月四日公家被奉

賀太上天皇五十寶筭於東山御所世謂之法

任寺公卿補任ヲ考ルニ是時重盛大納

言ノ右大将ナリ宗盛ハ權中納言左衛

門督ナリ知盛ハ中將ナリ重衡ハ左馬

頭中宮亮ナリ維盛嘉應二年任右近權

少將永安三年叙從四位下是時四位少

少將ナリ又玉葉云維盛青海波女

院ヨリ園白殿ヲ御使ニテ是

事玉葉所見ナシ

うち衣

補蹇駟嘶餘云裏衣ハ凡僧着之

えくウツラ衣ト訓ニス又云ウ

ツラ衣トハ重子ノ下キヲ云ナ

りトナシ

これとる入水の事

中少とあさいハイハ補太子傳ノ鈔ニ出タル語ナリ

聖徳太子ノ膳手妃ト永訣ノ下
中よりニアリ経論ニ本據アリヤ未考
ヘス

アさんさうれ秋のこ

補驃山宮ハ唐玄宗楊妃ヲ云甘
泉殿ハ漢武李夫人ヲ云赤松子
梅福ガ長生モ限リアルヲ云等
覺ハ佛地ニ亞ク者十地ハ法雲
地ヲ云菩薩ノ極位ナリ等覺ト
イヘトモイニ夕一分ノ無明ヲ
脱セズ故ニ生死アルトナリ

才六天のまろ

補四教集解云欲界六天者一四天王天二忉利天

三夜摩天四兜率天五化乐天六他化自在天之魔

事ノ説摩訶止観等考ベシ

源氏のせんといふ入る

補故事談長明發心集等ニ出タリ

七ツうれたうとらん

補賢愚經ニ出タリ

又人まて百子さ

補僧祇律ニ出タリ

始じ二あ

補無量壽經二詳ナリ

こゝめ久六十万かく

補觀無量壽經二詳ナリ

いひりあ

補按ルニ鉦鼓ヲ撃テ佛名節スル事經釋ニ

所據ヲ見ス或云空也上人ニ始ルト松尾明神ヨリ

鉦ヲ感得ストニ市屋道場金光寺ノ縁

起ニ出タリ六波羅密寺ノ空也ノ像ニ鉦ヲ頸

ニ掛タリ○参考太平記ヲ按ニ熊野人ノ口碑

ヲ引テ曰紀州牟婁郡有名藤繩要害處

是維盛伴為入海逃匿之地也ニ子孫在紀州以小松

為氏

三日月平氏此事

昔ニ子ニ

補名義集悉達唐言頓吉

名ニ神ニ

補名義集引西域記云太子出家令車匿

牽捷陟捷陟馬名入云車匿本是守馬奴名

二月一日改元有て元暦二号に

元暦元年四月十六日或秘記云此

日有改元事去年雖有其儀為即位

以前不被遂之然而天下猶未靜之

中

間即位又難被忘行踰年之後已及
數月仍且依乱逆不可即位以前可
被行也愚意猶未甘心畧改壽永三
年為元曆元年依代始無赦令上
心尤大臣

俊經 大應 弘治 大喜

兼光 元德 文治

光範 元曆 恒久 範寶

葉季 顯奉 應曆

同日除目とちりて源全の前の右多兼の依形録云下
此即位志録小

同三月廿五日或秘記云自今夜被

始行奉除目執筆尤大并經房○廿

八日記云見聞書無別事可為大除

目之由兼日謠哥而依頼朝申狀被

止玆事亦頼朝叙正四下若定

取望欵將又推被行欵然者同可被

任平一官欵

補百練抄云源頼朝叙正四位下

本從下天慶秀卿自六位叙四位

之例也

同き二日の日崇徳院と神とありめ守り

百練抄云元暦元年四月十五日賀
茂祭也宗徳院并宇治尤府廟遷宮
也件事公家不知食院中沙汰也仍
不被倅神事日也

いふはるるんま

補保元物語云新院ハ森院御所
北殿へ迂ラ也給_云白河殿
目ヨリ北河原ヨリ東春日ノ末ニ
有ケレハ北殿ト申ケル

五月の日の池の大納言_云於_云の_云関東へ下_云向_云申_云十_云方池
の大納言_云於_云の_云関東へ下_云向_云申_云十_云方池

考或秘記頼盛赴鎌倉者在壽永二
年冬與此書及東鑑異矣
壽永二年十月十八日或秘記云傳
聞頼盛_云逐_云電_云京中又_云鼓_云騷_云○同
十一月六日記云或人云頼盛已來
着鎌倉唐綾直垂立烏帽子侍二人
子息皆悉相具各不持腰力劔木_云
頼朝白糸葛水旱立烏帽子對面郎
從五十人許群居頼朝後_云其後頼
盛宿相模國府去頼朝城一日之行
程_云以目代為後見_云能保宿惡禪

師家云去賴朝居一町許云此事為
修行者說雅賴口取注送也
元曆元年六月一日武衛招諸池前
亞相給是近日可有歸洛之間為餞
別也右典廐並前少將時家等在御
前先三猷其後數巡又相互被談世
上雜事等小山小四郎朝政三浦介
義澄結城七郎朝光下河邊庄司行
平畠山次郎重忠橘右馬允公長足
立右馬允遠元八田四郎知家後藤
新兵衛尉基清等應召候御前簀子

是皆馴京都之輩也次有御引出物先
金作劔一腰時家朝臣傳之次砂金
一累安藝介役之次被引鞍馬十疋
其後召客之扈從者又賜引出物武藏
先召弥平允衛門尉宗清左衛門尉
季宗男
平家一族也是亞相下着最初被尋
申之處依病遲留之由被答申之間
定今者令下向欽之由令思案給之
故欽而未參著之旨亞相被申之太
違亭主御本意云此宗清者池禪尼
侍也平治有事之刻奉懸志於武衛

仍為報謝其事相具可下向給之由
被仰送之間亞相城外之日示此趣
於宗清處宗清云今向戰場給者進
可候先陣而借案關東之招引為被
酬當初奉公歿平家零落之今參向
之條尤稱耻存之由直參屋嶋前内
府
同六月五日東鑑云池前大納言被
歸洛武衛今辞庄園於亞相給上還
留之間連日竹葉勸宴醉塩梅調鼎

大納言小右衛門尉藤原朝光

味所被献之又金銀懸數錦綉重色
者也

大納言小右衛門尉藤原朝光

補公卿補任云五朔日自關東入
洛六月五日還任

伊賀伊勢國人之友兵を以てかきくくれハ源氏友

向して合戦

元暦元年七月八日或秘記云傳聞

伊賀伊勢國人木謀叛早ハ伊賀國

者大内冠者源氏知行仍下遣郎

從亦令居住國中而昨日辰刻家繼
法師田平家即從号平為大將軍大内
郎後亦悉伐取一又伊勢國信兼和泉
守已下切塞鈴麻山同謀叛一因此
事院中物忘取喻無物泰經作色只
今事可出來之趣也一凡不能左右
世間也可彈指一○同廿日記云傳
聞昨日伊賀伊勢謀叛之輩出逢近
江國与官兵合戰官軍得理賊徒退
散為宗者伐取一天下大慶何事
如之哉○廿二日記云傳聞謀叛大

將軍平田入道家繼被梟首畢其外
兩三人為大將軍者被伐畢一忠清
法師家資亦藏山平一又官軍之内
大仇々木冠者名不知被伐早凡官兵
之死者及數百一○又見東鑑七月五日
十八日及八月
二日三日之記

友戶の事

伊予廿八日都一新帝此即位多一神皇實録内結
有一位此是八十二代是一女一

元曆元年七月廿八日或秘記云此
日有即位事依治曆四年例於太政

官正廳被行之抑相待劔室歸來可
被遂行御即位哉否豫被向人々依
撰政及充大臣亦申不備劔室踐天
子之位異域雖有例我朝曾無踈然
而依叙之義并識者亦不知天意不測
神意可被行只以目耳
為川志る後戸こ
補藤戸ハ播磨ノ名所ナリ
あねとこところ
補是所ノ石今ニ醍醐三寶院ノ
前庭ニ在ナリ云

甲子六月廿日除目とて大納軍滿の冠者範
頼三河の守り冠者頼經五河守りなりとて使の宣旨と
蒙つて九帝利友とてなり

元暦元年六月廿日東鑑云去五日
被行小除目其除書今日到來武衛
令申給任人事無相違所謂權大納
言頼盛侍從同光盛河内守同保業
讚岐守藤能保參河守源範頼駿河
守廣綱武藏守同義信云○同廿一
日記云武衛召聚範頼義信廣綱等
有勸盃次被觸仰除目事各令喜悅

次就中源九郎主頻雖望官途吹拳
武衛敢不被許容先被舉申蒲冠者
之間殊悅其厚恩
同八月六日或秘記云源中納言來
數刻言談畧又云明日可有除書九
郎可任官者
同八月十七日東鑑云源九郎主使
者參申云去六日任左衛門少尉蒙
使宣旨是雖非所望之限依難被默
止度々勲功為自然朝恩之由被仰
下之間不能固辭云此事頗違武衛

御氣色範賴義信等朝臣受領事者
起自御意被舉申也於此主事者內
々有儀無左右不被聽之處遮企所
望歎之由有御疑凡被背御意事不
限今度歎依之可為平家追討使事
暫有御猶豫云

甲九月十一乃軍三河の事範賴平家追討の事云々
癸卯云々

同八月八日東鑑云參河守範賴為
平家追討使赴西海午剋進云旗差
之旗卷一人弓袋一人相並前行次參

州着餅村濃直虫加次扈從輩八千

餘騎並龍蹄所謂

北條小四郎足利藏人義兼武田兵衛尉有義

千葉介常胤境平治常秀三浦介義澄

男平六義村八田四郎武者朝家同男太郎朝重

葛西三郎清重長沼五郎宗政結城七郎朝光

藤内所朝宗比企藤四郎能負阿曾沼四郎廣綱

和田太郎義盛同三郎宗實同四郎義胤

大多和次郎義成安西三郎景盛同太郎明景

大河戸太郎廣行同三郎中條藤次家長

工藤一膳祐經同三郎祐茂天野藤内遠景

高小野寺太郎道綱一品房昌寬土佐房昌俊

以下也武衛構御棧敷於稻瀨河邊

令見物之給○九月十二日記云

參河守範賴朝臣去刑日使者今日

參着獻書狀去月廿七日入洛同廿

九日賜追討使官府今日九月發向

西海三

九月三日或秘記云早旦範季朝臣

來示不思義事參河國司範賴幼男

之時範季為養上洛問件事各不聞

不知之由有疑殆而手跡茫然猶不

可不位欤

在江の左の位人依本三希智徳よてあんるハ知る

同十二月七日平氏左馬頭行盛朝臣引率五百餘騎軍兵構城郭於備前兒嶋之間佐々木三郎盛綱為武衛御使為責落之雖行向更難凌波瀆之間濱瀉案轡之處行盛朝臣頻招之仍盛綱勵武意不能尋乘船作乘馬渡藤戸海路三町所相具之郎從六騎也所謂志賀九郎熊谷四郎高山三郎與野太郎橘三橘五等也

遂令著向岸追落行盛

昔よりるゆく川とつははあおのしとくを光海と海とて天竺展且とあつ次我知母は希代のたあーよりとてゆあは小嶋と依々木よし小孫舎後の山あま小と我れろ

同十二月廿六日東鑑云佐々木三郎盛綱自馬渡備前國兒嶋追伐尤馬頭平行盛朝臣事今日以御書蒙御感之仰其詞云自昔雖有渡河水之類未聞以馬凌海之例盛綱振舞希代勝事也

大嘗會乃沙汰の事

同き廿八日都より又除目よりなるりて九つ判友義經
み位の懸よりなるりて九つ判友義經

十月廿四日東鑑云因幡守廣元九月

十八日申云去月十八日源廷尉叙留

今日十一月一日聽院内昇殿其儀駕

八乗車扈從衛府三人共侍廿人各騎

馬於庭上舞蹈撥劔笏參殿上

十月二十日新帝此湯禊の儀幸あり

三日當作廿五日○元曆元年十月

廿五日大嘗會御禊也

同き十八日大嘗會のこころなる

當十一月十八日○元曆元年十一

月十八日或秘記云此日踐祚大嘗

會也

大嘗會の御紀

伊弉諾大神八日御祭事大嘗會行方なる事

八日の坐すに御祭事大嘗會行方なる事

十月廿四日 皇孫 皇孫 皇孫 皇孫

皇孫 皇孫 皇孫 皇孫 皇孫 皇孫

皇孫 皇孫 皇孫 皇孫 皇孫 皇孫

皇孫 皇孫 皇孫 皇孫 皇孫 皇孫

皇孫 皇孫 皇孫 皇孫 皇孫 皇孫

皇孫 皇孫 皇孫 皇孫 皇孫 皇孫

皇孫 皇孫 皇孫 皇孫 皇孫 皇孫

皇孫 皇孫 皇孫 皇孫 皇孫 皇孫

